

京都府立大学京都地域未来創造センター設立記念シンポジウム報告

基調講演

「今後の科学技術の進展と地域社会—大学は地域との協働でいかに役割を果たすべきか」

大西 隆 氏

(豊橋技術科学大学学長、日本学術会議会長、一般社団法人国立大学協会副会長、東京大学名誉教授)

【要旨】

「昨今の目まぐるしい科学技術の発展にともなって、地域社会のあらゆるシステムが大きく変わろうとしています。こうした状況の中、科学技術・社会科学の最先端に位置する大学は、地域社会とのきめ細かい対話・コミュニケーションを通して、地域社会が変革していく社会へのソフトランディングをスムーズに果たせるよう仲介的な役割を果たしていくことが求められます。またその際、地域社会を構成する地域の企業、諸団体との連携も強め、協働して地域の未来を創造していくことが、ますます重要になってきています。」

パネルディスカッション「京都地域未来創造センターが諸分野で果たす役割」

<パネリスト>

安部 孝幸 氏(株式会社京都銀行 公務・地域連携部次長)

塩見 直紀 氏(半農半X研究所代表、福知山公立大学准教授)

肥前 洋一 氏(高知工科大学教授 経済・マネジメント学群副学群長、高知工科大学総合研究所フューチャー・デザイン研究センター長)

大西 隆 氏

<コーディネーター>

宮藤 久士(京都地域未来創造センター産学連携リエゾンオフィス副所長、生命環境科学研究科教授)

まず、各パネリストから、15分から20分で、それぞれの取り組みの紹介をしていただきました。

安部氏(京都銀行)

2016年7月7日に、京都府立公立大学法人、京都府立大学、京都府立医科大学で「地域創生に関する包括連携協定」を結びました。これにより、産学連携を加速化させるとともに、今年度後期から、京都三大学教養教育共同化事業(京都工芸繊維大学、京都府立医科大学、京都府立大学)において、共同化科目「京都学」のうち、「京都の経済」をゲストスピーカーとして担当する予定です。

また、府大ACTR(地域貢献型特別研究)では、研究プロジェクトの選考をつとめたり、研究プロジェクト(バイオマス、六次産業化、食に関する研究)に関わっています。そのほか、京都府が主導する京都府公民連携プラットフォームの設立に関わり、京都地域未来創造センターとも連携しながら

ら、意見交換や情報交換を行っています。

塩見氏(半農半 X 研究所)

綾部市から参りました。会社員生活を経て半農半 X 研究所を立ち上げ、2年前から福知山公立大学で教員をしています。持続可能な農ある小さな暮らしをベースに、天与の才を社会に活かす生き方、暮らし方として、「半農半 X(エックス=天職)」というコンセプトを20年前から提唱し、みんなの X(エックス=天職)を活かしたまちづくりやローカルビジネス創造の支援を行っています。日本だけでなく、アジア諸国からも関心が高く、台湾、中国、韓国などでの著書の出版や講演依頼も続いています。

肥前氏(高知工科大学)

フューチャー・デザインとは、持続可能な社会を実践するために、将来世代を取り込んだ新たな制度・仕組みの構築めざす、学術分野とその実践です。2012年に、高知工科大学教授の西條辰義氏がマサチューセッツ大学でネイティブアメリカンのイロコイ族の話聞き、大阪大学の研究者と研究会を始めました。7世代先を見据えた社会のために、将来世代を設定し交渉する社会の創造をめざしています。

リサーチクエストとして、「現世代が将来世代の利益を十分に考慮できるようになる制度や仕組みとは?」「今の政策に将来世代の利益を反映させることができる制度・仕組みとは?」を掲げています。将来世代の立場で考える今の人たちを今の社会に創り出す「将来仮想世代」を設定し、討論会を開催しています。日本でも既に実践例があります。岩手県矢巾町、大阪府吹田市、長野県松本市、京都府与謝野町です。岩手県矢巾町では、町役場が、2060年の未来デザインの策定のためにフューチャー・デザインを活用した討論会を開催しています。現役世代と将来仮想世代が交渉し、世代間の合意に基づいて矢巾町2060年プランを決定しています。

パネルディスカッション

コーディネーター(宮藤 本学生命環境科学研究科教授)

「未来」をどのようにとらえるか

コーディネーター(宮藤)

それぞれのパネリストの方のお話を聞きまして、ひとつ質問をさせて頂きたいと思います。それぞれの捉える時間軸についてです。どのくらいのことを未来として捉えていらっしゃるか、それぞれのお立場から、コメントを頂ければと思います。

安部氏(京都銀行)

京都銀行の中期経営計画では、戦略ベースで3年ごとに回しています。銀行は営利企業でもありますので、融資先のことを考えると、5年先、10年先を見通すということは現実的には難しい

のですが、個人的な感覚で申し上げますと、10年でしょうか。10年先に向かって未来に進んでいるイメージです。

塩見氏(半農半X研究所)

農業であれば1年一作ということで一番スパンが短いのではないかと思います。また人づくりという視点ですと、20年でしょうか。伊勢神宮の式年遷宮のように20年に1回行い、人材や技術を絶やさぬよう、育てていくサイクルです。自身の中で意識しているのは、1000年に耐える思想・哲学を作っていくことがとても重要ではないかと思います。先人の知恵もありますし、そこに若い感性をミックスしていきたいと考えています。複数の時間軸を持つことが大切ではないかと思います。

肥前氏(高知工科大学)

フューチャー・デザインは最初、7世代先という未来に向けてプロジェクトをスタートしたのですが、イロコイ族の方々の時代の7世代と、今の7世代というのは異なります。イロコイ族の時代は7世代先も同じ土地に住み、同じ風景を見て生活していたのかもしれませんが、今はあまりにも変化が激しくスピードも速い。ですので、7世代先というのはスパンとして長すぎるように思います。将来会うこともない、将来の人というイメージで将来をイメージするのが妥当なように思います。

大西氏(豊橋技術科学大学学長、日本学術会議会長)

どの立場から発言するのかわによって変わりますが、都市計画の研究者としての立場から申しますと、都市計画の議論をするときは100年ぐらい必要だということで、100年先までの時代の変化というのを考えています。学長としての立場となりますと、先まで考えると悲観的になるので、もうちょっと短く考えたいという思考が働いています。

宮藤(コーディネーター)

それぞれ何に取り組むか、また、どの立場かによって、未来というのは少し年限が違うということですね。では最後にセンターへの期待について、コメントをいただければと思います。

京都地域未来創造センターへの期待について

安部氏(京都銀行)

企業と研究者との橋渡しの役割、リエゾン機能を果たしていただけるものと期待をしています。京都銀行も「つなげる」をキーワードに取り組んでいます。個人のお客さんでしたら、未来につなげる。親から子へ、子から孫へとつなげると。法人さんでしたら、お客さん同士をつなげる、事業を拡大につなげる、海外につなげると。このような金融機関としての「つなげる」を大学ともやっていきたいと考えています。

塩見氏(半農半X研究所)

農村に住んでいるとすごくたくさんの方がいますが、「半〇半×」というようなダブルミッションを持つ、新しい人材像を研究していただきたいです。それから、京都府は南北に長く、縦長ですが、南北をいかにつなげていくか、交流デザインや新しい組み合わせを作っていくことをやっていただきたい。一人が2つのミッションを持っている組み合わせでいけば、可能性は多様にあって、その組み合わせが世界を変える魔法になる可能性があるのではないかなと思います。

肥前氏(高知工科大学)

センターには相談や調査研究で、様々な事例や課題が集まってくると思いますが、ひとつひとつ対処しておしまいせずに、対処するなかで、どのように地域や自治体を運営していくか、こうやればいいんだ、という法則性を見出すところまで到達していただきたい。そういう法則性を見出すと、学術的にもやっていることの意義が高まると思います。そうすると、センターとしての格もひとつ上がりますし、全国にも貢献できます。少し、時間がかかるかもしれませんが、最終的にはそこを目指していただければと思います。

大西氏

今日のお話を伺って、未来創造にとって、想像力や空想力が非常に大切ではないかと感じました。あまり短い時間軸だと、足元で来年の政策や行動をどうするのかということになり、問題の設定の仕方が少し単純になりすぎる。少し先を設定して、やはり創造力を働かせて、常識的な論理思考では思い浮かばない、少し変わったことを言う。そういう答えを出すようなセンターであることが必要なのではないでしょうか。

京都は、権力のすぐ近くになんかいいところがある。ぜひ変わったことを言い続けて、みんながちょっと意見を聞いてみたいとか、あまり従いたくないけれども意見を聞いてみたいというような気になる存在になるというのが重要ではないでしょうか。今日のメンバーのようにいろいろな形でアドバイス、意見交換をする機会を作っていく。何か気になる言葉を発する組織ということ意識していくことが大事だと思います。

コーディネーター(宮藤)

ありがとうございます。未来というところで地域の課題を解決しつつ、時間的には未来につなげていく。さらには空間的にも大きくしていくことがセンターに課せられた使命ではないかというお言葉をいただいたかと思います。